

高等学校英語授業における生徒一人一人の エンゲージメントを高める方法を探る — スピーキング活動 Small Talk を通じて —

中村 綾

金沢大学大学院教職実践研究科

【概要】本研究は、高等学校英語授業において、生徒と教師双方がスピーキング活動に積極的に取組めるようなエンゲージメントが高まる学習デザインを探った。その結果、不正解になることに戦々恐々としながら正解に辿り着くことに心を砕くことなく生徒は日常生活に密接したトピックで自由に意思疎通を試みた。会話を始めるまでに、生徒が「よし、やってみよう」と思えるように教師が手立てを準備することで、行動的エンゲージメントが高まった。相手に話したいと思える身近なことや好きなことをトピックにすることで感情的エンゲージメントが向上した。また、相手に理解してもらえるようにどう伝えるかを考えるとき認知的エンゲージメントが高まり、会話中につまずきがあったとき、相手の反応や質問によって会話を継続することで社会的エンゲージメントが促進された。今後の課題は、英語のコミュニケーションに日常的な話題を入れる良さを残しつつ、生徒がより深い内容のコミュニケーションにエンゲージできるようになる学習デザインの開発であると考えている。

I 研究の背景

筆者の授業では、これまで生徒の英語のスピーキング活動に対する積極的活動参加が見られなかった。その原因として、今まで以下の2つの問題点を考えてきた。その2つとは、言いたいことを言えないもどかしさ、間違える恥ずかしさ、である。しかし、これらの問題だけが、生徒の積極性を削いできたのだろうか。もっと根本的な問題はないのだろうか。それについて考えていた時に、学習者エンゲージメントの理論を知った。この理論を学んで、今までの授業がエンゲージメントを促すものになっていなかったと省察した。

Mercer & Dörnyei (2020) は、「学習者エンゲージメント」を「学校に関連する活動や学業的な課題に対して、夢中になって取り組んでいる状態を意味する」(p. 12)と定義している。また、彼らはエンゲージメントの可塑

性に言及している。ここでの可塑性とは、「教師の働きかけによって学習者のエンゲージメントを高めたり弱めたりすることが可能だ」(p. 19)という意味である。授業者はこの理論から、授業スキルやタスクへの取り組み方を考え直し、エンゲージメントを促し高める方法を探りたいと考えた。これが研究の動機である。

エンゲージメントには、行動、認知、感情、社会の4つの側面がある。廣森(2023)は、次のように述べている。

「第1に、エンゲージメントの各側面は密接に関連しているということです。このことは、エンゲージメントのある側面に働きかけることで、他の(別の)側面にプラスの影響を与え、結果として、取り組み全体を促進できる可能性があることを意味して

います。たとえ興味がわからない課題であっても、とりあえず10分だけと思って始めてみる（行動的にエンゲージする）と、意外と面白くなって夢中で取り組んでしまう（感情的にエンゲージする）といったことはよくあるはずです。」(p.157)

冒頭、スピーキング活動における生徒の消極性に言及したが、この活動は、生徒が軌道に乗るまで時間を要するものであると考える。授業者自身も英語を用いて生徒に話題を提供し、生徒を巻き込んでいく過程に苦戦することが多々あった。例えば、導入の際に生徒に「どのように話したら教師の意図が伝わるか」ということを考えるのだが、教師の考える手立てと生徒の理解には大きな溝があることをこれまで幾度も感じてきた。生徒が取り組みやすいと判断して用意したトピックであっても生徒が話しにくそうにしていたり、導入のTeacher Talkを理解しやすいように容易な英語に言い換え、かつ、補助としてスライド等の視覚教材を用意しても生徒の理解の一助とならなかったりしたことがあった。このような時には授業者も「一人相撲をとっている空しい時間」だと感じてきた。同様の感覚が生徒にもあり、スピーキング活動への意欲を削がれてきたのだろうと推察する。よって、エンゲージメントの理論に基づいて生徒への支援や授業デザインを考えることは、こうした授業者に関わる問題も解決できる可能性があるのではないかと考えた。その上で、授業者と生徒の双方のあり方が学習成果に大きな影響を与えると思われるスピーキング活動Small Talkに焦点を当て検討することとした。

このような背景の下、これまでの授業で熟考しきれていなかったSmall Talkのトピックの選定や視覚教材の工夫により、導入のアプローチの仕方を変えてみて生徒のエンゲージメントを高められるようにしてみたいと考

えた。

Ⅱ 目的と研究課題

本研究では、生徒と教師双方がスピーキング活動に積極的に取組めるようなエンゲージメントが高まる学習デザインを探ることを目的とし、次の研究課題を設定した。

(1) トピックによって生徒のSmall Talkに取り組む姿勢に変容はあるのか。あるとしたら、どのような変容か。

(2) 教師と生徒のインタラクションを増やすことで、生徒同士のインタラクションに変容はあるのか。あるとしたら、どのような変容か。

(3) Small Talkを継続することによって、生徒の取り組む姿勢に変容はあるのか。あるとしたらどのような変容か。

Ⅲ 方法

1. 対象生徒

石川県立高等学校 普通科1年39名

2. 実践研究の期間

令和6年4月から11月

準備：4月、5月生徒の実態把握

実践Ⅰ期：6月14日、7月8日、7月12日、7月17日計4回

実践Ⅱ期：9月9日、9月18日、9月20日、9月27日計4回

実践Ⅲ期：10月11日、10月18日、10月25日、11月11日計4回

3. 方法の概要

Small Talkの取り組みにおいて教師の働きかけを工夫する。(1) 生徒が話したくなるようなトピックの選定 (2) 教師と生徒のインタラクションをもつこと (3) 話す内容を考える手立て、キーワードからマッピングそしてモノログを段階的に施行しⅠ期からⅢ期で12回実施し生徒の変容を見ていく。具体的には生徒の変容を教師と生徒の双方の視点から振り返る。教師の働きかけとタスクデザインによって生徒のエンゲージメントをどのよ

うに高められるのかを、対象者全員へのアンケート（選択式による生徒の認識調査と記述式による調査）と抽出生徒へのインタビューの変容を通して見ていく。

4. 教師の働きかけの方策

Small Talk における生徒のつまづきを想定して、必要な教師による手立てを検討した。その結果を教師の働きかけと期待される効果として、表 1 の通り整理した。

表 1 教師の働きかけと期待されるその効果

	教師の働きかけ	期待される効果
1	トピックの選定に生徒の意見を取り入れる	与えられたトピックではなく、当事者意識をもつ
2	話す内容のキーワードを書かせる	話す内容の整理をしてから話す
3	活動に移る前に時間を与える（モノローグ）	どんな内容を話すか考え、声に出して言う
4	トピックに合わせたキーワードを提示する	会話の始め方に困らず、安心して始められる
5	Teacher Talk時の英語を容易な英語で伝える 複数回繰り返し伝える	教師の英語を聞いてトピックを理解し、よく使われる英語表現を参考にする
6	教師と生徒のインタラクションを持ち、これからの活動をイメージさせる	教師と生徒のやりとりを参考に、Small Talkの流れや話題の広げる質問の投げ方を考える
7	キーワードを見て、自由に話題を変えることも選択肢に取り入れる	複数のキーワードから違う話題に変えることもできて間に困らない
8	1文を短く、簡潔にわからない単語や表現を言い換えられるように指導する	日本語で考えた内容を易しい英語で表現できるか考える
9	相手の良いところを真似る、また参考にしようとする指導する	相手とのやりとり（繰り返し、リアクション、質問）を続ける
10	同じトピックで2回以上、ペアを換えて行う	話の流れを掴み、1回目の修正をすることができる

5. データ収集と分析

アンケート項目は Small Talk で生徒がエンゲージしている姿を落とし込んで作成し、アンケートの文を行動、認知、感情、社会の4つのエンゲージメントの要素に分類した。I 期では実践毎に行い、II 期では最後の4回

目に、III 期では3回目と4回目に実施した。なお、記述式による調査については各実践での報告の中で記載する。

（1）アンケート項目

〈認知／感情〉

質問 1. Small Talk に参加するために自分の話す内容を考えようとした。

〈認知／感情〉

質問 2. トピックは内容を考えやすいものだった。

〈認知／感情〉

質問 3. 英語で自分の伝えたい内容を相手に伝えようとした。

〈行動／社会〉

質問 4. 相手に言いたいことが伝わっているか窺いながら、伝え方を工夫しようとした。

〈認知／社会〉

質問 5. 相手の言いたいことを理解しようとした。

〈行動／社会〉

質問 6. 相手の言っていることがわからないときに、聞き直したりした。

〈行動／社会〉

質問 7. 相手が言いたいことが言えずにいる時に、質問したりして話をつなげようとした。

〈行動／感情〉

質問 8. 同じトピックで1回目より2回目の方が積極的にやりとりしようとした。

〈感情／社会〉

質問 9. 時間を気にせず、集中してやりとりに取り組もうとした。

〈感情／社会〉

質問 10. 相手のリアクションを励みにやりとりを続けることができたか。

回答方法は、5 件法で以下の通りにした。

5：あてはまる

4：ややあてはまる

- 3：どちらともいえない
2：あまりあてはまらない
1：全くあてはまらない

(2) 抽出生徒

生徒の中から6人をランダムに抽出した。それぞれを生徒Aから生徒Fと表記する。アンケート結果や実践への取組みの様子を取り上げる。また、11月に個別にインタビューした内容を主に総合考察で扱うことにする。

IV 実践

1. 実践I期

1.1 Small Talk の型

- 1) 教師による英語の話を聞く（適宜視覚教材やジェスチャーを使用）
- 2) 教師と生徒のインタラクション（やりとりのモデル）
- 3) 生徒同士が英語で話す（2、3分）、その後ペアを交代（2、3分）このときに音声をそれぞれChromebookで顔は映さず音声のみ動画で撮る
- 4) アンケート、生徒による録音の確認
- 5) 動画の提出（Google Classroom）

1.2 トピックと質問

英語コミュニケーションの授業で、以下のような日程・トピックの内容(T)・質問(Q)で実践を行うこととした。

〈6月14日〉

T: Sports tournament

Q: Do you have good news / experiences?

〈7月8日〉

T: Hobbies

Q: Do you have any hobbies?

Do you have something you like to do in your free time?

〈7月12日〉

T: Seasons

Q: Which season do you like better, summer or winter?

〈7月17日〉

T: Food tickets

Q: Which food tickets are you going to buy?

1.3 教師の働きかけ

生徒が Small Talk により取り組みやすくするため、以下の4点の取組みをした。

(1) トピックの選定に生徒の意見を取り入れるために、アンケートをとる。

(2) Teacher Talk ではプレゼンテーションソフトを活用して、言語だけでなく視覚教材で話の内容を理解しやすくする。

(3) 生徒同士の会話を始める前にヒントとなるキーセンテンスを提示して、スライドはいつでも見られる状態にしておく。

(4) 相手と会話が続くような質問の投げ方を練習する。相手が答えやすい Yes / No question から WH question への流れの指導をする。

1.4 アンケート自由記述式による調査項目

〈6月14日〉

やりとりで話したいトピックはあるか。

〈7月8日〉

Small Talk を行うときに、自分が抱えている問題は何か。

〈7月12日〉

自分の録音を聞いての感想は。

〈7月17日〉

録音を聞いてみて、1回目と2回目の Small Talk、どちらの方が思い通りに話せたか。

1.5 結果と考察

(1) トピック

実践1回目では、6月初旬に石川県高等学校総合体育大会と石川県高等学校総合文化祭があったため、それぞれ新しい経験が鮮明に残っていると思い、Sports tournament をトピックにした。部活動で大会がない場合や所属していない生徒は学校での過ごし方や週末にしたことなど「先週」のニュースを伝え合うトピックにした。

トピックの選定に生徒の意見を取り入れるために、6月にアンケートをとり、その結果

(表2)で1番多かった回答 Hobbies を実践2回目のトピックにした。

表2 アンケート「やりとりで話したいトピックはあるか」

1	趣味	14名
2	学校に関すること(部活・教科など)	11名
3	時間の過ごし方(放課後・休日)	8名

実践3回目のトピックは Seasons、キーセンテンスは“Which season do you like better, summer or winter?”で、この文を設定した理由は選択肢が限られていて選びやすい点と、理由も浮かびやすいと授業者が考えたからである。選択肢に春、夏、秋、冬、どれをもってくるかはペアで好きに決める自由度も加えた。

実践4回目のトピックは Food tickets でキーセンテンスが“Which food tickets are you going to buy?”であった。この文を設定した理由は、8月末の文化祭の模擬店チケット購入という全員共通した話題があったからである。3年生が作ったそれぞれの模擬店のポスターを視覚教材として用いた場合、話しやすいのではないかという狙いがあった。

(2) インタラクショ

Teacher Talk の導入において、何のトピックでどのようなやりとりをすればいいのかという活動の見通しをもてるように、二つの工夫をした。一つ目は、初めのスライドにトピックを書いて生徒に示した。それを確認させた上で、インタラクショ活動に入った。二つ目は、教師と生徒のインタラクショの中で、授業者の例示に対する英語の質問を生徒からできるだけ引き出すようにした。

2回目の Hobbies の実践では、生徒のインタラクショに行く前に、授業者の趣味として、Movies / Music / Fashion / Arts を示した。「こんな趣味がある人にどんな質問ができるかペアで考えてみて」と投げかけた。生徒は黙って考えた後、ペアでどんな質問ができるか声に出しながら意見交換した。その間、

授業者(T)は机間に入り込んで生徒(S)に質問した。

T: Do you have any questions?

S: Art. Which do you like, make or look?

T: I like to go to some museums to see some artworks. How about you? Do you like to go to Art museums? Have you ever been to 21 美?

S: Twice.

という様に自分に訊かれた質問を相手にも訊くことで共通点を探ることもできる。自分が出した話題を相手にも振ることで、共通点を見つけやすくなる。会話が弾むことで、話すことへの心理的負担が軽減される。

3回目の実践では、次のような授業者(T)と生徒(S)とのインタラクショがあった。

T: Do you like summer?

S: No.

T: Which season do you like?

S: I like winter.

T: Which season do you like better, Autumn or Winter?

S: Winter.

T: Why do you like winter?

S: . . .

そこで生徒が黙ってしまった状況を全体に実況しながら会話を続けた。その後、生徒に尋ねた質問は以下の4つで、○は答えられたもの、×は答えられなかったものである。

○ “Do you go skiing in winter?”

○ “Do you go skiing with your family every winter?”

○ “Where do you ski?”

× “How long have you been skiing?”

そこで、相手が答えにくいと思ったら具体的な質問をすること、相手の様子を窺いながらやりとりすることの大切さを強調した。また、この会話の例のように楽しくないと話が続かない。会話を盛り上げるためには共通点や共感できる話題を見つけることが重要だと

伝えた。加えて、1回1回違う質問を考えるのも大変で間ができてしまう。それを避けるために自分に訊かれたことを相手にもする、自分が話題に出したことを相手にも質問してみる練習にも取り組ませた。

（３）質問するための手立て

教師の働きかけと必要な手立てを考えるために、7月8日にアンケートで「自分が抱えている問題は何か」と訊いてみた。その結果は表3が示すように、単語や文法という英語力に続き相手とのやりとりを続けるスキルがないことに不安を抱えていることがわかった。

表3 アンケート「自分が抱えている問題は何か」

1	単語や文法	14名
2	話が発展しない、間ができること	11名
3	質問を考えること	8名

上記の生徒の不安、すなわち、相手とのやりとりが続かないことの原因について考えたところ、それは相手が答えにくい質問をしていることや答え方にさまざまな選択肢がある質問を投げかけていることではないかと推論した。これらの問題に対処するために、相手が答えやすい質問に言い換えるため、Yes / No question から WH question などさまざまな質問の投げ方を繰り返し指導した。I期の2回目のトピックは、6月に生徒に取ったアンケート（表2）で1番多かった回答 Hobbies とした。しかし、これも訊き方を工夫しないと話が進まないだろうと予測した。例えば “Do you have any hobbies?” のような Yes / No questions から Small Talk を始めると何が起きるか。Yes と答える生徒は Hobbies で話す内容があるということになるが、Hobbies ということばで訊かれると、Hobbies と言えるほどのものはないと考えてしまう場合もある。こうした状況を回避するため、どのように会話を始めたらよいかを考えた。たとえば、次のような英語表現に言い換えるとどうなるだろうか。 “Do you have

something you like to do in your free time?” であるとか、“What do you like to do in your free time?” という訊き方であると、Hobbies という響きがしっくりこない生徒にも「好きな事」は考えやすい質問になる。

（４）Small Talk の掛け声

これまで Small Talk を始めるとき、いつもじゃんけんや授業者が “people with longer hair” と指示を出していたが、4回目の授業で「挨拶した方がいいよね」と生徒に投げかけたら、生徒が “Hello!” と元気にお互いに挨拶して会話が始まった。この “Hello!” の掛け声で一気に空気が明るくなった。突然質問に入るより生徒は活動しやすそうだ。簡単なこの掛け声がペアのアイスブレイクの役割を果たしていることに気づいた。

（５）アンケート分析

7月12日のアンケートで「自分の録音を聞いての感想は」という質問をした。生徒それぞれの振り返りは、具体的に課題がまとめられていて今後の参考になった。

[7月12日アンケート回答例]

- 1) 難しいことを聞いてしまっている。
- 2) 自分が思っていたよりも相手が yes と no で答えられるような質問が少なかったの
で次からはもっとこの2つで相手が答えられるような質問を増やしていきたいです。
- 3) 一通り質問するのではなく、日本語の会話同様に交互に質問を交えて会話をしたい。
- 4) 相手に支えてもらっている感じがしたので、自分も会話を繋げられるように頑張りたいです。

これらのアンケートより、相手の様子をよく見ながら行えていることがわかる。そして、授業者からのアドバイスに対して真摯に取り組む姿勢も窺える。3) のコメントで「一通り質問する」というのは実際の話の流れを考えずスライドに書かれている疑問文をそのまま

の順番で訊いてしまったことに対する反省と普段の日本語での会話と比較して英語の会話が不自然であると気づいている。4)では「相手に支えてもらっている」ことから自分も頑張りたいという社会的エンゲージメントが働いていることが覗えた。

次に、I期の3回目7月12日(表4)と4回目7月17日のアンケート(表5)の結果を比べてみた。授業者は季節の話題より模擬店チケットの話題の方が生徒の認識(肯定的回答)は高くなるのではと予想していたが、アンケート10問(5点満点)の結果を見ると、大差はないにしても問7以外では7月12日の方が高かった。

表4 7月12日定型選択式アンケート n=38

【7月12日アンケート結果分布表】 n=38										
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10
5	27	22	21	17	33	17	13	18	18	18
4	10	12	15	17	4	11	13	12	14	12
3	0	3	2	3	1	8	8	5	5	8
2	0	1	0	1	0	2	4	2	1	0
1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表5 7月17日定型選択式アンケート n=38

【7月17日アンケート結果分布表】 n=38										
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10
5	21	21	20	16	29	11	11	17	18	20
4	13	11	16	13	8	14	19	13	18	15
3	4	2	2	8	1	8	6	5	1	1
2	0	2	0	1	0	4	1	2	1	2
1	0	1	0	0	0	1	1	1	0	0

これは意外な結果であった。模擬店のポスターが視覚教材として Small Talk の足場かけとなることや全員に共通する初めての話題であること、など話す材料が生徒各自にあると思ったが、そこから話が広がらず、経験していない事柄に対して気持ちが乗った表現が出てきづらい印象であった。トピックが生徒に関わる事実であるか、自分の考えを加えられる話題なのか、実体験があったり感情が動いたりした話題なのかなどが、話の展開や生徒の「語りたい」気持ちを左右するのだと気づいた。

1.6 課題

2つのアンケートの回答を見ると、No.6と7の肯定的な回答が少なかった。生徒は話の流れの中で聞き直すことや、即興で相手か

ら具体的な内容を聞き出すことが苦手であることがわかる。これらのことは、話し手になった場合に最初の一言は言えるが次に続く具体的な話ができていないことと関連しているのではないかと考えた。自分の話をより具体的な内容までに発展させられないために、相手の話からも具体的な内容を聞き出すという話の展開がイメージできない。話の筋や広がりや派生など会話が続きイメージを持たせる必要があると感じた。また、具体的な内容を伝えようとしても適切な表現が出てこない生徒も数多くいるだろう。言いたいことが頭に浮かんだとしても、単語力や表現力が不十分で、それを英語で表現できないというもどかしさもあると思う。自分の思いを相手になんとか伝えるために、習得している表現を用いて言い換えられる力が必要となる。こうした技能を習得して会話を続け楽しむことができると、さらに行動的エンゲージメントと社会的エンゲージメントが高まるのではないかと考えた。

2. 実践Ⅱ期

2.1 Small Talk の型

- 1) 教師による英語の話を聞く(適宜視覚教材やジェスチャーを使用、トピックの提示はここではしない)
- 2) 教師と生徒のインタラクション(やりとりのモデル)
- 3) 話す筋のキーワード3つを紙に書く(慣れてきたら内容を膨らませ、マッピングに発展させる)
- 4) 生徒同士が英語で話す(2、3分)、その後、ペアを交代(2、3分)
- 5) 動画の提出(Google Classroom)
- 6) アンケートは最後に1回のみ行う

I期との変更点は、1) トピックを最初から提示しない、4) 声だけでは録音が聞き取りにくかったため、会話する2人の顔が映るように動画を撮る、6) アンケートは毎回ではなく最後に1回のみ行うとした。追加点は、

3) キーワードやマッピングを紙に書く。削除した点は、時間がかかりすぎるため生徒が自分の録画を見ること、である。

2.2 トピックと質問

英語コミュニケーションの授業で、以下のような日程・トピックの内容(T)・質問(Q)で実践を行うこととした。

〈9月9日〉

T: Summer vacation Vo. 1

Q: Did you enjoy your summer vacation?

〈9月18日〉

T: Summer vacation Vo. 2

Q: Did you enjoy your summer vacation?

〈9月20日〉

T: Ice cream, 'Oshi'(推し), Subjects or Club activity

〈9月27日〉

T: Recommendation

Q: Do you have any recommendations?

2.3 教師の働きかけ

生徒が Small Talk により取り組みやすくするため、以下3点の取り組みをした。

(1) 生徒が考えたトピックの案を複数提示し、選択肢を与えた。同じトピックの生徒と自由にペアを組める座席を認めた。

(2) 話の筋を考える助けとなるキーワードを書いてから、Small Talk を行う。即興性には欠けるが話す内容がすぐに思いつかなかったり、話しながら次の英語表現が出てこなかったりした様子を目にしたからだ。また、3つ目のキーワードは、感情を表す表現を持ってくる。さらに、もっと内容を膨らませるために、2つ目のキーワードからマッピングを広げさせる。

(3) 1文を短く簡潔に伝わる表現に言い換える練習をする。部分的に日本語も使用可能にし、全くしゃべれずに苦しい時間に終わらないようにする。

2.4 アンケート調査

I 期では毎回定型のアンケートと記述のア

ンケートを行っていたが、II 期では最後の9月27日に1回だけアンケート(定型選択式10問と追加の問い)を行うことにした。また、II 期より生徒が Small Talk に取り組みやすくするために、どのようなことが生徒にとって役に立つのか知りたいと思いアンケートに取り入れることにした。

[9月27日に追加したアンケート項目]

No.11

・あなたの Small Talk をするときの目指す姿はどんな感じですか?

No.12

・9月から取組んだ Small Talk で、一番印象に残ったトピックは何ですか。

4: 9月9日「夏休みの思い出 Vo. 1」

3: 9月13日「夏休みの思い出 Vo. 2」

2: 9月18日「アイス・推し・教科・部活」

1: 9月27日「私のオススメ」

No.13

・Small Talk を取り組もうとするとき、役立ったことは何ですか。1つ選びなさい。

10: 先生の話す英語を参考にする

9: トピックの選定に関わる

8: (話の流れの) キーワードを書く

7: 話す前に、モノログすること

6: 先生のスライド

5: ペアの良いところを参考にする

4: 1回で終わらずに、2回行う

3: 自分の録画を見て、振り返る

2: ペアを変えて、行う

1: その他

2.5 結果と考察

(1) トピック

9月9日の授業では、夏休みの思い出から良いことでも悪いことでも印象に残ったことについて3つキーワードを紙に書かせた。授業者は、1) Sushi 2) Covid 3) Dance Practice と書いたものを見せた。大きなできごとだけではなく些細なことでもよいと伝えることを意図したが、生徒たちには3つでさ

え思いつくことは大変であったようだ。想定外なことに、英語でキーワードを書くために辞書を使う必要も出てきた。思った以上に時間を要した。Ⅱ期から顔の表情も映して動画を撮影させた。撮影させることで、キーワードを書いたメモを見て“With your friends?”など話題を変えるペアの様子も確認できた。新しい手立てを導入したので、2回目のトピックは変えずにもう一度9月9日の3つの夏の思い出からどれか1つを選んで行うことにした。

3回目の実践では9月にとった「今話したいトピックは何か」というアンケートの答えをもとに、4つのトピック Subjects / Oshi(推し) / Ice cream / Club activity を挙げて、この中から取り組みたいトピックを選ばせてやることにした。それから前回と同じように3つキーワードを書く時間を取ったが、なかなか手が動かない生徒がほとんどであった。これまであまりプライベートなトピックを選ばないようにしていたが、Oshi(推し)を選ぶ生徒が活発に話す様子を見て、授業者も含め自己開示を含むトピックも挑戦してみようと考えた。そこで4回目の実践では、Recommendation とした。授業者自身も「リアルさ」を意識して普段使用している「シートマスク」について話をした。女子には分かる子もいた。男子は何のことか全く理解できない様子であったが集中して聞いていた。

(2) インタラクション

Ⅱ期からは、話す内容を始めからスライドに提示しないようにした。そして最初からテーマを絞って会話するのではなく、さりげなく生徒に話を投げかけるように心掛けた。4回目ではやっとキーワードに慣れてきた。Teacher Talk に入る前にアイスブレイクとして、“Do you have any good news?”と全体に投げかけてみた。ペアで話し合った後、教師と生徒のインタラクションを始めたが、“Yes”と答える生徒はあまりいなかった。1

人の生徒が“finish homework”と答えてただけであった。“Oh, you finished your homework? All homework?”と尋ねると生徒が首を振った。“O.K. Some of them.”

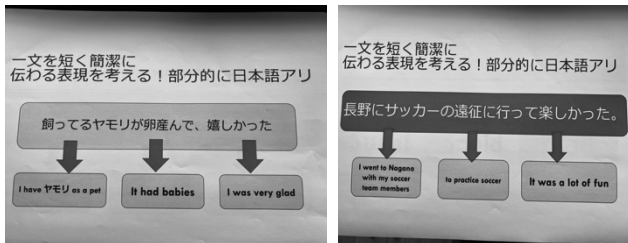
ここから Teacher Talk を始めた。“I also have a good news. I always use シートマスク in the morning and I finished using the whole masks today. Have you ever used シートマスク? Yes? O.K. Some of you have. I finished using the whole シートパック and it tells me 大大吉. At the bottom it tells me fortune, good words. It gives me good words. At the bottom, it tells me 大大吉. Have you ever used シートパック before? Can you ask your partner that question?”ここから生徒に質問を考えるよう指示をした。“Can you think of any questions about my story?”以下は生徒から出た質問の例である。“What message did you get?” “先生の favorite シートマスク” “Other words?” “How much?” “How many シートマスク?” “When do you use it?”ここで授業者が“There are many kinds of シートマスク.”と言い足すと、生徒Dが“Why did you choose this シートマスク?という質問をした。授業者は、“Good question! It is easy to use and I like the design. It is very cute.”と言いながら黒板にデザインを描いて見せた。さらに“There are many colors of シートマスク.”とヒントを出すと、“What color of シートマスク do you use?”という質問を引き出すことができた。ここから何色かを何人かに当てさせた。そこからトピック Recommendation のスライドを示した。「パックのおススメか？」と困惑する男子もいた。

(3) 1文を短く伝える表現に言い換えるための手立て

他の教員から「言いたいことがあっても使える英語表現が限られているため、結局英語で言える無難な内容で話してしまうことがあ

る」という意見をもらった。そこで9月18日では、これまでの生徒のつまずきに対してアドバイスすることから始めた。具体的には表6のスライドを示して「1文を短く、簡潔に伝わる表現に言い換えて、部分的に日本語はO.K.」というパラフレーズの方法を伝えた。

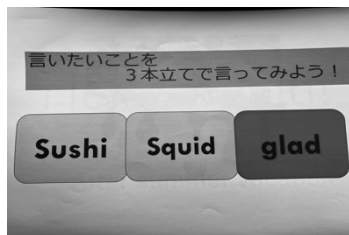
表6 1文を短くするための指導で使用したスライド



例として(表6)「飼ってるヤモリが卵を産んで、嬉しかった」と「長野にサッカーの遠征に行ったら楽しかった」、この2文を3つの部分に分けて短文にする練習を全体で行った。

(4) 話の筋を考える手立て：キーワード

表7 話の筋の3つのキーワードを考えるための指導で使用したスライド



2回目の実践で話の筋を考えるために3つのキーワードを紙に書くことをした。新しい取り組みをするときには、トピックは変えずに、もう一度9月9日の3つの夏の思い出からどれか1つを選び、話の筋を考え3つのキーワードを書かせた。3つ目は、自分の感情を表現することにした。表7は授業者の例である。“I love eating Sushi. I went to eat Sushi during the summer vacation. My favorite Netta is squid, especially Gesso. It was very delicious. I was very glad.”と部分的に日本語を混ぜながら紹介した。

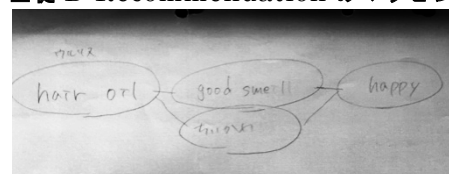
前回、夏の思い出に関して3つのキーワードを書きだすことが難しいことがわかった。今回は話の筋をキーワード3つで書かせることを進めたが、ある生徒は書かずに、でも何

やら指を折り曲げながら口元でぶつぶつ言っているような素振りだったので、そのまま見守った。また、キーワードではなく文で書く生徒もいた。このように授業者がスモールステップだと思って足場かけをしても、何も書かなかったり、単語を英語で書かずに日本語で書いたりする生徒もいた。キーワードを書くだけでも時間がかかるので、実際に即興で話すときに具体的な内容が口をついて出てこないことも理解できた。

3回目の実践では、授業者が Subjects を挙げて例を示してやってみた。English・Movie・Study Abroad・Exciting というキーワードを書いて、短く簡潔に伝える英語を意識してデモンストレーションした。2つ目を Movie にしたことで、必ずしも教科としてや学校内に関わるものとして考える必要はないことを気づかせたかった。それぞれ場所やペアを替えて2回行った。初めてトピックを選べる取組みに生徒も沸いていた。さらに座席を移動するとき仲の良い者同士で座る生徒が多かったので、にぎにぎしい雰囲気だった。

実践4回目のトピック Recommendation で生徒 D は、Small Talk のとき文法も気を付けながら話すことができていた。“I recommend this hair oil, (髪を触りながら) hair oil. It is good smell and cute package. Now if you buy this, you can get chikawa package. Do you know chikawa? I'm so...when I use this, I'm so happy.”このときのマッピング(表8)を見てみると、hair oil から始め、真ん中に「ちいかわ」と good smell の2語を書き、内容を膨らますことができており、最後に happy で感情を表していた。授業者の例示が影響を与えた事例だと思う。

表8 生徒 D Recommendation のマッピング



(5) アンケート分析

Ⅱ期の授業では、キーワードの書き出しや Teacher Talk にインタラクションを取り入れるなどの手立てをしたので、4回目の実践の後、アンケートで Q:「Small Talk をするときに役に立ったものは何か」という問いを投げかけた。結果は 33 人中 14 名が「先生の話す英語を参考にすること」、9 名が「(話の流れの) キーワードを書くこと」を選んだ。Teacher Talk や生徒同士のインタラクシヨンの英語表現や疑問文を自分が話すときに使ってみたり、Small Talk の 1 回目で相手の良い英語表現を 2 回目に活かしたりしている場面も見られた。みんな完璧ではないが、英語を聞いていたことがわかる。

また、「9 月から取り組んだ Small Talk で、一番印象に残ったトピックは何ですか」という問いに対して、33 人中 15 名が「アイス・推し・教科・部活」、12 名が「私のおススメ」を選んだ。この結果から、トピックに選択する余地があったり自由度があったりしたものを生徒は好んでいると言える。選択肢はトピックの選定には重要な要素であると考えた。4 回目の実践でとったアンケート結果(表 9)を見ても、No. 2:「トピックは内容を考えやすいものだった」の肯定的回答が低かった。そしてインタラクシオンでさまざまな種類の質問を考えさせたが、結果的に No. 6 や 7 の肯定的な回答も低かった。話し手として内容がおぼつかない場合、やりとりもぎこちない感じになってしまうと考えた。キーワードを書いているときにもさまざまな例を挙げてヒントを出していたが、生徒にとってはピンとこなかったようだ。

表 9 9 月 27 日定型選択式アンケート n=33

【9月27日アンケート結果分布表】 n=33										
	No.1	No.2	No.3	No.4	No.5	No.6	No.7	No.8	No.9	No.10
5	23	11	19	15	25	12	6	22	15	14
4	7	15	9	12	6	14	16	7	15	14
3	2	5	5	5	2	5	7	4	2	2
2	1	2	0	1	0	1	4	0	1	1
1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	2

そこで、生徒 C にインタビューすると、「なんも思いつかんかった。」とトピックが考えづらかったと答えた。「結局、緑茶にして、理由は緑茶が苦いから一気に飲むことができないから水分摂りすぎにはならないという理由を言いたかったけど難しかった。」という想定外の話聞いて授業者は驚いた。

Q:「Small Talk をするときの目指す姿はどんな感じですか?」という質問に対しては、「リアクションや質問をして会話が途切れないようにすること」など相手の発話に対応できる力をもっと付けたいと感じていることがわかる。

2.6 課題

Ⅱ期ではキーワードを導入したことにより、生徒はこれまでより話の筋を具体的に考える足場かけを得ることができた。キーワードを書くまでに時間はかかるが、Ⅲ期では、マッピングを用いて内容を少しずつ膨らませる取り組みを続けていくことにした。さらに、モノログを導入してやり方を変えながら、エンゲージメントが高まるように授業改善を試みる。インタラクシオンではキーワードに時間を要して、あまり活発なやりとりが行えなかった。依然として、質問を考えることが苦手な様子である。生徒にもっと英語を話すのを促すためには、教員も生徒もウォーミングアップが必要だと感じた。そのために、Ⅲ期では、Teacher Talk のはじめに簡単な問かけを全体で共有しペアで会話して、英語で考え口を動かし一気に本題に入らず雰囲気と和ますことを心掛けたい。またアイスブレイクゲームを用いて、「これ、英語で何て言えいいの?」と考える機会を与えることにも臨む。

3. 実践Ⅲ期

3.1 Small Talk の型

- 1) アイスブレイク
- 2) 教師による英語の話を聞く(適宜視覚教材やジェスチャーを使用、トピックの提示はここではしない)

- 3) 教師と生徒のインタラクション（やりとりのモデル）
- 4) 話す筋のキーワード3つを紙に書く。慣れてきたら内容を膨らませマッピングに発展させる
- 5) モノログ（英語でつぶやいてみる）
- 6) 生徒同士が英語で話す（2、3分）、その後ペアを交代（2、3分）このとき会話する2人の顔が映るように動画を撮る
- 7) 動画の提出（Google Classroom）
- 8) アンケートは最後の2回のみ行う

Ⅱ期との変更点は、8) アンケートは毎回ではなく最後に2回のみ行うこととした。追加点は、1) アイスブレイクを取り入れた。ウォーミングアップとして、自分の知っている英語をフルに活用しながら実際に口を動かす訓練の機会をもっともつべきだと考えたからである。また、西（2010）を参考に、やりとりを始める前にまず一人でつぶやき、相手に聞いてもらう5) モノログを追加した。

3.2 トピックと質問

英語コミュニケーションの授業で、以下のような日程・トピックの内容（T）・質問（Q）で実践を行うこととした。

〈10月11日〉

T : Favorite food or restaurants near the school

Q : Do you know some places where you can eat near the school?

〈10月18日〉

T : Favorite YouTube channels

Q : Do you watch any YouTube channels?

〈10月25日〉

T : Pets for old people

Q : Do you think Aya should buy her mother a dog?

〈11月11日〉

T : Sports tournament or cultural events / sports day / club activity or studies / weekend

3.3 教師の働きかけ

生徒がより Small Talk を取組みやすくするために、以下3点の取組みをした。

（1）トピックに選択肢を与え、座席はそのままお互いに話したいトピックで会話をする。

（2）アイスブレイクゲームを取り入れる。比較的小となしい生徒から積極性を引き出すため、実際に口を動かして英語を話すウォーミングアップを、授業開始時点で行うべきだと考えた。これを導入することで、硬い雰囲気はなくなり間違いを恐れる気持ちも小さくなると期待できたからである。そこで、毎回授業の冒頭にペアで出されたお題を英語で相手に伝えるアイスブレイクゲームを実施する。これを Small Talk よりも頻繁に行う。生徒の意見を取り入れ、ルールを変えながらアレンジする。なお、実施したお題は以下のとおりである。

1) 「ドリンクバー」 2) 「ファミレス」

3) 「わんこそば」 4) 「コンビニ」

5) 「学食」 6) 「ピザ」 7) 「風呂」

（3）モノログを取り入れ、Small Talk をする前に、相手に聞いてもらいながら予行練習する。

3.4 アンケート調査

Ⅲ期では、10月25日に追加の選択制の質問と最後の11月11日に定型のアンケートと追加の選択制と記述の質問をした。

[追加したアンケート項目]

・授業で Small Talk をするのは楽しかったですか。

5 : あてはまる

4 : ややあてはまる

3 : どちらともいえない

2 : あまりあてはまらない

1 : 全くあてはまらない

また、上記の答えの理由を書きなさい。

・Small Talk を授業に取り入れるのは良いと思いますか。

- 5 : あてはまる
- 4 : ややあてはまる
- 3 : どちらともいえない
- 2 : あまりあてはまらない
- 1 : 全くあてはまらない

・Small Talk を通じて自分が成長した部分を日本語で答えなさい。

3.5 結果と考察

(1) トピック

1 回目のトピック **Favorite food or restaurants near the school** は、学校の周辺で飲食をする場所について情報交換できたら面白いのではないかと考えた。生徒同士も食に関することはそこまでプライベートに気を遣うものでもなく、学校付近にどんなお店があるのか、生徒が行く共通のファミレスでも自分の食べないメニューを知ることでも適切なトピックであると判断した。

2 回目の実践は、**YouTube channel** をトピックにした。自己開示を心掛け、授業者も普段見ている **YouTube** を紹介することにした。

3 回目の実践では、今までとは異なる形式で **Pets for old people** というトピックを扱った。これは授業者の母親が犬を飼いたいと言っているが、どうすればいいと思うか、という題材に対して意見を話し合う活動であった。

4 回目では、トピックの選択肢として、以下の4つのトピックを示した。①新入大会に出た生徒が話せる話題として **sports events / cultural events** ②その週にある球技大会について話せる生徒用に **sports day** ③新入大会に出ずに学校に残った生徒が話せる話題として **club activity / studies** ④その他、週末のことを話せる生徒用に **weekend** を準備した。座席は移動しないまま、それぞれ自分の話したいトピックについて話すという方法をとった。授業者は **weekend** の話題でカニの解禁で香箱カニを食べに行った話をした。しゃべりながら黒板にマッピングを書いてそれを見せて生徒に質問させ、やりとりを行った。

(2) インタラクション

インタラクションの工夫のポイントは、Ⅱ期から続けている通り、話すテーマを最初からスライドで提示しないこと。また、最初からテーマを絞って会話するのではなくさりげなく生徒に話を投げかけるように心掛けることだ。さらに、**Teacher Talk** の途中で話している内容理解の意図も含めて、生徒間で質問し合いながら進めることにした。そうすることによって、話についていけない生徒も少しずつ隣の生徒に訊く機会をもてる。キーセンテンスも複雑であるときには板書するようにした。

3 回目の実践では、まず授業者と生徒にとってもアイスブレイクが必要だと判断して、クラス全体に簡単な質問 “**Do you like animals?**” を授業者が投げかけた。その後トピックの提示まで、その質問を基に **Teacher Talk** で教師と生徒のインタラクションをできるだけ多く実施した。また、ペアで同じ質問をし合うよう指示した。そうすると、そのまま質問するペアもいたり、“**What kind of animals do you like?**” と問いかけるペアもいた。少し間をおいてから机間に入っていき生徒 A に聞くと、“**I like my dog.**” と答えたのでみんなが笑った。そのまま続けて生徒 A にいくつか質問した。“**What kind of dog do you have?**” に対して「えー忘れた」と答えると、クラス全体がそのやりとりに和やかな雰囲気になった。授業者が “**help, help**” と周囲の生徒に声をかけると、「チワワ？ポメラニアン？」と犬の種類を挙げ出した。「あ～ポメラニアン」と答え、再び授業者が “**How long do you have it?**” 聞き、また生徒 A が目を泳がせながら考えだした。「3ヶ月」が言えず、また周囲の生徒に助けを求め、“**three months**” と答えた。これだけ初歩的な会話でも言葉に詰まったり、単語が思い浮かばなかったりすることを改めて感じた。

もう一人の生徒に聞いた。“**Do you like**

animals?” “What animals do you like?” と聞くと、“Cat” と答えた。異なる疑問文を提示しなかったのも、“Do you want to have a cat?” “Have you asked your parents to have a cat?” などと聞いた。質問がわからないときは周囲の生徒を巻き込んで助けるよう促した。その生徒は最初 **parents** の意味が分からなかったようだ。そこから、その生徒は **parents** を理解して、“My father said, Yes, but my mother said No” と説明した。みんな理解して笑った。授業者もジェスチャーを加えながら、生徒のシンプルな英語をリピートした。

“Why not?” “What’s the reason for it?” という、“My mother like cat, but can't live” と答えた。次に別の生徒に質問した。その生徒は犬も猫も欲しくないと言ったので、“Why?” と聞くとウサギを飼っているからと答えた。“Is it difficult to take care of a rabbit?” と聞いた。

そこから、授業者は今日のトピックについて話し始めた。“The other day, my mother asked me to buy a dog. She is over 60 years old. Old people can't buy a dog because they get too old, so they can't take care of it. What should I do?” という内容も2回以上繰り返して生徒に伝えた。ペアでトピックの内容を確認するように指示した。トピックの内容がわからず、ペアのどちらか一方の生徒が説明している組もあった。その後、“Why does my mother want to have a dog? What do you think?” と問いかけ、生徒 D に訊くと、

“Because she is lonely.” と答えた。“Maybe so, if I don't buy her a dog, I should do something different for her, right?” と買わない場合は他に母親にしてあげられることは何かあるか、買う場合でも、買わない場合でも **good points** と **bad points** を考えるよう言った。次の英文を書いたスライドも作っていた。“What do you think? Do you think Aya should buy her mother a dog? What should

Aya do? Why does Aya's mother want to have a dog?”

(3) アイスブレイク

アイスブレイクゲームでは、一人が外国人役でもう一人が日本人となり日本文化を知らない外国人にお題を英語で説明する設定で行った。時間は1分として、どれだけ具体的に詳しく長い文を作れるかで競った。聞く側の生徒には、英語をメモ取るよう指示した。1回目のお題は、「ドリンクバー」とした。実施後の反省はルールを明確にすべきであったということである。単語だけを連呼したり、わずかな説明を聞いただけで相手が解答したら、その時点で話すのをやめてしまったりするペアもいたからである。ただ、授業者が、1回終わる毎に“**more than 10 words?**”と聞くと、いつもは手を挙げない生徒が手を挙げた。そういう面からいつもより全体が参加する雰囲気を作れたように感じた。

2回目から、このアイスブレイクが、相手に合わせて説明の仕方を考えたり、自分の知っている英語表現から適切なものを選んだりする訓練となればよいというねらいを持って臨んだ。また、ペアの内、より多くの語数を用いた生徒の方が勝ちであるというルールにして実施した。3回目のお題は「わんこそば」にした。これを説明するとき、**when** 節や **if** 節が出やすいと予測していた。しかし、わんこそばのルールを知らない生徒や「蓋をしないとまたそばを入れられる」ということを知らない生徒がいたことが授業後に判明した。知らないものを説明させるのは無理だと反省して、お題の選定を慎重に行うようにした。

(4) モノローグ

モノローグ活動では、**Small Talk** に取り組む前に書いたキーワードをもとに、1分ほどで自分の話したい内容を英語で独り言のようにペアの相手に伝えることにした。その様子は、**Chromebook** で撮影することにした。最初は、相手は聞くだけでリアクションもしない、と

いうルールでやったが、生徒から「それだとやりにくい」という意見があったので、聞いているとわかるようなリアクション（うなずいたり、笑ったり）することにした。

（５）アンケート分析

３回目と４回目の実践が終わったあと、Q:「Small Talk を取り組もうとするとときに、役立ったことは何ですか。」という質問をした。その結果、３回目は 39 人中、12 人が「(話の流れの) キーワードを書くこと」、「先生のスライド」が 6 人で、「モノローグ」が 5 人であった。４回目は、「先生の話す英語を参考にすること」が 10 人、「(話の流れの) キーワードを書くこと」が 10 人、「モノローグ」が 5 人であった。その時々で数値が変わるのも興味深く、授業の内容を反映していることがわかる。授業者にとっては静まり返っているとやりづらい雰囲気だと感じるが、生徒は一生懸命聴いて参考にしていたことがわかった。話すことがまとまらずに英語で話さなければいけないことが負担と感じていることや途中で会話が途切れて間ができることが苦痛だと感じていることに対処するためにキーワードからマッピングに発展させたことも有効な手立てになったことがわかる。

以下はアンケートで Q:「Small Talk を通じて自分が成長した部分を日本語で答えなさい。」という質問の何人かの生徒の回答を載せる。①「自分の話したいことを相手に伝えるために文章を工夫したり、話すテンポや反応を見ながらプレゼンのように一方的でなく、コミュニケーションとして英語が使えるように以前よりなったので良かった。」②「自分で英文を考えて、それを言葉にして相手に伝える動作を 1 回じゃなくて何回もするから、２回目に付け足してみたり自分で英文を考える力がついたと思う。」③「話している間に次の内容も思いつくようになってたり受け答えが上手になって話がスムーズに進むようになったと思います。」④「いつもは分からなかったら

すぐに日本語で聞き返したり、単語でしか会話をしていなかったけれど、一つの文章をいかに長くする方法や、トピックに対しての様々な質問を考えられるようになりました。だけど、まだ考えられるようになっただけで、思ったことを上手く英語で相手に伝えられていないことも多々ありました。」⑤「自分の知っている英語で自分の話したいことを相手に伝える力が前より上がった。キーワードを聞いて伝えたいことを理解できるようになってきた。」

Ⅵ 総合考察

１．研究課題（１）トピック

トピックによって、生徒の Small Talk に取り組む姿勢に変容はあった。抽出生徒へのインタビューにおいて YouTube の話のときは、以下のような回答があった。生徒 D「普段見ないから、何を話していいか分からなかった」生徒 A「普段自分が見ているものはあまりみんな知らないだろうから、同系のものでより知られているものにした」生徒 F「自分の見ているものを人に話したくないから、みんなが知っている無難なものにした。生徒 F に「じゃあどんなトピックが話しやすい？」と聞いたら、「アイス」のときは話しやすかった、「好きな食べ物」とかと答えた。生徒 E に聞くと、「みんな自分の好きなことや推しについて話すときにはニコニコしている、趣味の話も盛り上がった」という意見もあった。授業者も生徒 F の意見に同意した。授業者も見ている YouTube をクラスに話すことに多少なり抵抗があった。トピックに関する他の意見では、生徒 C は「選択肢があることがよい」、「アンケートで話したいトピックについて聞くことも良い」と言った。

以上のことから、トピックに関する生徒の意見はさまざまで、どこまで自分のプライベートを他人に話したいかも異なる。トピックの内容も重要だが、選択肢があることによって生徒が「よし、できる」と活動に取り組みや

すいと感じることが重要だとわかった。限られたトピックを提示することで生徒の活動にエンゲージするチャンスを奪うことがないようにしようと思った。

2. 研究課題（2）インタラクション

I期では、Teacher Talkで授業者の例を示しながらトピックの説明をいかに英語で生徒に理解させることができるかということに力点を置きすぎて、生徒とのインタラクションが少なかった。それによりやりとりのイメージが生徒に十分に伝わらず、Small Talkを上手に行えない生徒が多かった。それはSmall Talkの動画での様子で現れていた。授業者の指導が生徒にそのまま反映されていることに気づき、その後授業デザインの改善を試みた。生徒に授業者への質問を考えさせることから始め、徐々に教師と生徒のインタラクションをもつように努めた。II期からはトピックを最初から提示せず、会話するところから教師と生徒のインタラクションをもつようにした。授業者が机間に入って行って生徒に話しかける様子を他の生徒は目で追って話を聞こうとしている様子が撮影したビデオで確認できた。普段話さないクラスメイトが何を語り、普段話さない話題にどんな答えを返すのか、生徒たちは興味津々な様子であった。教師と生徒のインタラクションによって、生徒同士のSmall Talkへのエンゲージメントの高まりを左右する空気を感じた。

3. 研究課題（3）継続することによる姿勢

15頁で示した通りQ:「Small Talkを通じて自分が成長した部分を日本語で答えなさい。」に対する回答を見ると、実践で指導してきたことに対して生徒一人一人がその成果を実感していることがわかった。また、キーワードなどの足場かけも、この先それがなくてもできるようになりたいと次の目標を掲げていることもわかった。生徒Eの回答で「キーワードがあるため自分が話す内容が定まっているとはいえ、相手からくる質問は未知数で

あり、その場に応じて相手がわかりやすいように伝えることの重要性を学んだため、即興力はだいぶ身についてきた気がします。」と書かれているのを読んで、やりとりでは即興性が失われずに生徒たちはその場で考え行動することにエンゲージしていたと理解した。

VII 今後の課題

本研究では、生徒の抵抗感やつまずきに対する手立てを、生徒の実態や反応を見て段階的にI期からIII期まで試行錯誤しながら指導してきた。しかし、その一方で足場かけを設け過ぎて、生徒たちの自立を妨げているのではないかとも考えた。導入を丁寧にするほど、時間も長くなる。生徒同士のインタラクションは1回ごとに2、3分であるが、この短時間のoutputに長時間のinputを要することが実践を通じて理解できた。教師と生徒双方にとって効果的なアイスブレイクを探しながらスピーキング活動を取り組みやすいものにしていきたい。今後の課題は、段階を踏んで足場はずしを試み、英語のコミュニケーションに日常的な話題を入れる良さを残しつつ、生徒がより深い内容のコミュニケーションにエンゲージできるようになる学習デザインの開発であると考えている。

引用文献・参考文献

- 1) Mercer, S & Dörnyei, Z (2022) *Engaging Language Learners in Contemporary Classrooms* : Cambridge University Press (マーサー, S & ドルニュイ, Z (2022) 『外国語学習者エンゲージメント主体的学びを引き出す英語授業』アルク)
- 2) 廣森友人(2023)『改訂版 英語学習のメカニズム 第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法』大修館書店
- 3) 西 巖弘(2010)『即興で話す英語力を鍛える!』ワードカウンターを活用した驚異のスピーキング活動22』明治図書出版株式会社